

文化的自己観に基づく親密感変動の日米比較

吉田 綾乃*・黒川 正流**・堀毛 一也***

*広島大学大学院生物圏科学研究科

**広島大学総合科学部

***岩手大学人文社会科学部

Comparative study of closeness-changing based on the cultural view of self in Japan and United States

Ayano YOSHIDA, Masaru KUROKAWA, and Kazuya HORIKE

*Department of Behavioral Sciences,
Faculty of Integrated Art and Sciences,
Hiroshima University,
1-7-1 Higashihiroshima 739-8521, Japan*

要 約

The purpose of this study is to investigate both effects of the cultural differences and the cultural view of self on closeness changing for the close-partners (e.g., friends, family, romantic partner) in the specific situations. On the basis of Markus & Kitayama (1991), we assumed that the interpretation of the situations, which changes closeness, would be affected by the cultural view of self. We hypothesized that in the situations, which sampled in Japan, the Japanese subjects would report greater change in closeness level than the Americans, and the subjects who had the interdependent view of self would show greater change in closeness level than the individuals having the independent view. The results shows that the Japanese's change level of closeness were higher in the situations that imply an attitude of sympathies, the expectation of the social role, and suggesting his/her weak points, than the American's. On the other hand, the American subjects change their closeness highly in the situations that impact upon individual's independence, the pride and the self-confidence, than the Japanese subjects. In addition, the cultural differences but not cultural view of self explained this difference. Implications of these results are discussed.

Key Words : cultural view of self, situation, closeness-changing

問 題

人は他者との相互作用を通じてその他者への親密感を高めたり低めたりする。特定の状況におい

て、特定の他者が行う特定の行動が当事者間の親密感の変動に及ぼす効果は、人々が生活する文化圏を越えて普遍的であろうか。また、自己と他者のありようについての前提となる文化的自己観(Markus & Kitayama, 1991)についての個人差は、親密感の生成と変動にどのような効果を及ぼすであろうか。

今日、社会経済活動のグローバル化によって、多様なレベルでの異文化間交流が促進されその必然性が高まっている。どのような国や文化においても、人々は家族、友人、恋人といった親密な関係性を一つの基軸として様々な社会的行動を行っている。しかしこれらの対人的関係の生成過程や社会的行動は、文化間の交流が比較的制約されていた長い歴史の間にそれぞれ文化的に構成されたものであり、グローバルな普遍性を前提することはできない。したがって、親しい人間関係の定義、人々の関係の知覚、関係の形成過程やルール、さらにはそこでの感情プロセスなどの文化的特徴を正しく理解することが、異文化間理解の促進に寄与するものと考えられる。すなわちわれわれは、対人関係形成に際して重視される個人特性のみならず、当事者に共有されている状況のもつ意味合いが文化によって独自の特徴をもつものと考えられる。

北山(1994)は、文化的自己観を「ある文化において、歴史的に共有されている自己についての前提」と定義し、日本を始めとする東洋文化圏で優勢な相互協調的自己観と、北米を始めとする西洋文化圏で優勢な相互独立的自己観に分類している(Markus & Kitayama, 1991)。相互協調的自己観によれば、自己とは他の人々や周りのものごとと結びついて高次の社会的ユニットの構成要素となる本質的に関係志向的な実体である。相互独立的自己観によれば、自己とは他の人々や周りのものごととは区別され切り離された実体である。各文化で優勢な文化的自己観は、その文化に属する個人が接する様々な社会的場面において、当該自己観に基づく判断を惹起し、またその自己観を支持するような行動をとらせる。その結果、各文化で共有される状況そのものにも、そしてそのような社会的な状況に注意を向ける心の働きにも、独立あるいは協調という文化的自己観が反映されてくると述べている(Kitayama, et al., 1997)。このような観点からすると、親密な関係が構築される状況として日本文化に属する人々が共有している場面には相互協調的自己観が、また同様の状況としてアメリカ文化圏に属する人々が共有している場面には相互独立的自己観が、それぞれ優勢に反映されているはずである。

一方、この文化的自己観の概念は、比較文化的な問題だけでなく、同一文化内の個人差比較にとっても有効であると考えられている。二つの自己観の相対的優勢度を自己スキーマ(Markus, 1977)の一つと考える観点から、相互独立的-相互協調的自己観尺度が作成され、日本人被験者の間に優勢度の相違があることが報告されている(Kitayama, et al., 1991; 黒川, 1994; 木内, 1995; 高田・大本・清家, 1996)。また、Singelis(1994)によれば、アメリカ人被験者にも同様の結果が得られている。

さて、われわれが扱おうとする親密感とは親密な二者関係で交換されている感情である。親密な二者関係とは、Kelley, H.H.(1989)に倣って、永続する性質をもち、二人が自分たちをひとつの単位として見なすとともに、周囲からもそのように見なされることの多い二者関係であると定義する。

ある文化内で親密感に関連するとして人々に共有されている状況には、その文化で優勢な自己観が反映されていると思われる。つまり、日本文化に属する人々が親密感の変動に関連すると考える状況には相互協調的自己観が反映されており、アメリカ文化に属する人々が親密感の変動に関連すると考える状況は相互独立的自己観を反映しているのである。そして人がそのような状況に遭遇した場合、その文化に属する人は異なる文化に属する人にくらべて親密感をより大きく変動させるであろう。また、その文化で優勢な自己観と一致する自己観をもつ人は、一致しない自己観をもつ人にくらべて親密感をより大きく変動させるであろう。具体的な仮説は以下の通りである。

(仮説1) 日本文化に属する人々が親密感の変動に関連すると考える状況では、日本人の方がアメリカ人よりも親密感を大きく変動させ、また相互協調的自己観の優勢な人の方が相互独立的自己観の優勢な人よりも親密感を大きく変動させるであろう。

(仮説2) アメリカ文化に属する人々が親密感の変動に関連すると考える状況では、アメリカ人の方が日本人よりも親密感を大きく変動させ、また相互独立的自己観の優勢な人の方が相互協調的自己観の優勢な人よりも親密感を大きく変動させるであろう。

本研究の目的からすると、仮説1と仮説2は相互補完的に検証しなければならない課題である。しかし今回は、研究実施期間の制約と研究協力者との打ち合わせの齟齬のため、日本文化における刺激状況の抽出だけしかできなかった。したがって本報告は、仮説1についての検討結果のみに留まった。

予 備 調 査

先行研究によれば、親密感を強める要因として、身体的な魅力、外向性や明朗性などの社会的望ましさ(中里ら,1975)、性格や態度や価値観の類似性(Byrne, D., Ervin, C.R. & Lambert, J., 1970; 松井, 1987)、好意の返報性(Aronson, E. & Linder, D., 1965)、自己開示(中村, 1991; 大坊・奥田, 1996)などがあげられている。一方、親密感を弱める要因としては、相手に対する配慮や共感の欠如、プライドを傷つけるような行為、えこひいき、不平等(古畑, 1993)などが指摘されている。しかし、これらの要因の効果は比較文化的に検討されていない。ここでは、文化的自己観は現実を構成する機能を持つ(北山, 1998)という視座から、親密感の対象となる相手の属性と行為を含む状況をそれぞれの文化で抽出することを試みた。

調査時期・調査対象者 親密感が強まる状況については、1997年6月24日に、東北地方の私立大学で人格心理学を受講中の学生91名(男性21名、女性70名)を対象とした。彼らは履修要件の一部として質問紙調査に参加した。平均年齢は、20歳(SD=.98)であった。回答不備者2名を除く89名を分析の対象とした。

親密感が弱まる状況については、先の強まる状況と同じ被験者に他日(1997年7月1日)記述を求めた。このときの回答者は99名(男性19名、女性80名)であった。

質問紙構成 親密感が強まる状況については、「あなたと(同性の友人)との関係について考えてみて下さい。あなたがその(友人)に対して、親密さを感じるのは、その(友人)がどのような場面で、どのようなふるまいをした時ですか。思いつく状況を具体的に挙げて下さい」とし、同性の友人の他に、()内を恋人、家族、被験者が属する組織(仕事、地域活動、アルバイト等)の中の人、に置き換えて、それぞれについて自由に記述するよう求めた。親密感が弱まる状況については、「あなたが親しくつきあっている(同性の友人)との関係が気まづくなったと感じるのは、その(友人)がどのような場面で、どのようなふるまいをしたときですか。今まで経験した出来事の中から、できるだけ具体的に挙げて下さい」とし、先と同様にして同性の友人の他に、恋人、家族、被験者が属する組織の中の人について自由に記述するよう求めた。

結 果 親密感が強まる状況として771状況が挙げられ、親密感が弱まる状況として576状況が挙げられた。その中から、日本的心性に関する著述(中根, 1972; 南, 1983; 東, 1994; 波多野・高橋, 1997)などを参考にして、心理学専攻の学生(男性3名、女性5名)が親密感に強い影響を及ぼすと思う状況を選定した。その中から4種類の相手役割すべてにおいて親密感に影響を及ぼすとされた4つの状況を選定した。(以下、文化的状況と記述する)。また、特定の相手についてのみ親密感

に影響を及ぼすとされた状況から相手役割ごとにそれぞれ4状況ずつ、合計16状況を選定した。(以下、役割状況と記述する)(Table 1.)。

Table 1 日本文化から抽出した親密感変動に関連する状況

文化的状況 (友人、恋人、家族、組織内の人に対して)	
状況番号	状況1+ () に悩みを相談したところ、参考になるアドバイスはなかったが十分な共感を示してくれた
	状況2 () にお金や物を貸したがなかなか返ってこない
	状況3+ () がひとりで解決できない問題の処理を私に頼んできた
	状況4 () の方が悪いのは明らかなのに、私の責任にされた
役割状況	
状況番号	友人1+ 友人が欠点など言いづらいことを正直に口にした
	友人2 友人が私のいない所で私のプライバシーを言いふらした
	友人3 友人が髪型や服装を変えたときに何も言ってくれなかった
	友人4 友人が、私と行こうと言っていた店や映画に、先に他の友人と行ってしまった
	恋人1 恋人が私の前で以前の恋人のことを話し始めた
	恋人2+ つきあい始めてまもない恋人が二人だけでどこかへ行こうと言い出した
	恋人3+ 恋人にありのままの自分を見つめてごらんと言われた
	恋人4 恋人が友人とばかり話していて、自分にあまりかまわずにいた
	家族1+ 離れて暮らしていても家族が支えになると感じた
	家族2 家族のメンバーがお互いにけんかをしている
	家族3 家族が自分に関係のあることを自分に相談なく決めた
	家族4 自分の生き方に家族が反対し、その進路に進んではいけないと言った
	組織1+ 同じ組織内の方が自分の属する他の組織での不満を聞いてくれた
	組織2+ 同じ組織内の方が組織内での自分の立場や本心を話してくれた
	組織3 同じ組織内の方が、自分のノルマをきちんと達成していない
	組織4 同じ組織内の方が、自分はたいした仕事もせずにリーダーとしてふるまう

note. +は、予備調査において親密感が強まる状況としてサンプリングされたもの

本 調 査

方 法

調査対象者・調査時期 日本人対象者は、東北地方の私立大学で社会心理学を受講中の大学生から、2年5ヶ月の滞米経験者1名と回答不備3名を除いた男性50名、女性152名の計202名であり、平均年齢は男性20.42(SD=.99)歳、女性20.26(SD=.99)歳であった。彼らは1997年9月に履修要件の一部として質問紙に回答した。アメリカ人対象者は、米国East Carolina Universityで入門心理学、社会心理学、教育心理学および統計学を受講中の大学生で、男性41名、女性87名の計128名であり、平均年齢は男性22.22(SD=3.79)歳、女性22.16(SD=4.67)歳であった。調査は1998年6月に、それぞれの授業担当教員が教室で実施した。アメリカ人用の質問紙は、日本語版をまず吉田が英訳し、言語学を専攻するアメリカ人男性と20年以上に亘って滞米中の日本人女性が文章表現を修正した。さらに

East Carolina Universityのアメリカ人心理学教授の助言に基づいて再修正したものをを用いた。

質問紙構成 質問紙の冒頭に、対人関係に関する質問であることを述べ、face sheetには性別、年齢、学年、アメリカ人対象者には人種に関する記入欄を設けた。質問紙はSection AからSection Eまでの5つのパートで構成した。Section Aでは上述の4つの文化的状況における親密感の変動を質問した。Section Bは、4種類の相手役割それぞれに独特の役割状況4つずつ計16項目の回答を求めた。Section C以下はいずれも自己観を測定する尺度であった。今回の報告では特にSection Eで測定したKitayama, et al.(1991)の尺度値を用いて分析を行った。

Section A 文化的状況において相手の役割別に親密感の変動を検討する項目

先述の方法で選定した4つの文化的状況において、主語を()で記述し、()内が、それぞれ「友人」、「恋人」、「家族」、「被験者と同じ組織に属する人」であった場合に、あなたのその人

Table 2-1 The questions used to measure (Kitayama,et.al., 1991より. 英語版)

Approval of the interdependent construal

1. Are you thoughtful of other people?
2. How important is it for you to be thoughtful of other people?
3. Are you the kind of person who *never* forget a favor of others?
4. How important is it for you *not* to forget a favor of others?
5. Are you kind to others?
6. How important is it for you to be kind to others?
7. Are you the kind of person who *never* fail to return obligations to others?
8. How important is it for you to return obligations to others?

Approval of the independent construal

1. Are you the kind of person who holds on to his or her own view even when others disagree?
 2. How important is it for you to hold on to your own view even when others disagree?
 3. Do you have your own opinions on everything?
 4. How important is it for you to have your own opinions on everything?
-

Table 2-2 自己観測定に用いた項目 (日本語版)

協調的自己観の項目

1. あなたは他の人に対して思いやりのあるほうですか
2. あなたの人生観として他の人に対する思いやりはどれほど重要ですか
3. あなたは人から受けた恩を忘れないほうですか
4. あなたの人生観として恩を忘れないことはどれほど重要ですか
5. あなたは人情に厚いほうですか
6. あなたの人生観として人情に厚いことはどれほど重要ですか
7. あなたは義理がたいほうですか
8. あなたの人生観として恩を返すことはどれほど重要ですか

独立的自己観の項目

1. あなたは自分自身の主張を貫き通すほうですか
 2. あなたの人生観として自分自身の主張を貫き通すことはどれほど重要ですか
 3. あなたは何事につけても自分自身の意見を持っているほうですか
 4. あなたの人生観として自分自身の意見を持つことはどれほど重要なことですか
-

物に対する親密感はどのように変化しますか?と質問した。実際に経験がない場合には、想像して回答させた。項目は合計16項目からなり、回答形式は「かなり弱くなる」=1から、「変わらない」=4、「かなり強くなる」=7までの7段階評定である。

Section B 役割状況における親密感の変動を検討する項目

文化的状況と同様に、相手役割ごとに4状況ずつ選定した計16項目の役割状況において、各役割の人物に対する親密感がどのように変動するかを質問した。項目の配列順序はランダムであった。回答形式は「かなり弱くなる」=1から、「変わらない」=4、「かなり強くなる」=7までの7段階評定である。

Section E 相互独立的-相互協調的自己観尺度

Kitayama, et al.(1991)は、相互協調的自己観に関する8項目と相互独立的自己観に関する4項目からなる自己観尺度を開発して、自己と他者の類似性判断様態の日米比較を行っている。用いた項目はTable 2-1と2-2に示す。12項目のうち6項目は態度・行動傾向の設問であり、残り6項目はそれぞれ態度・行動傾向に対応した人生観の設問であった。回答形式は前者については「全くそう思わない」=1から、「非常にそう思う」=7までの7段階評定であり、後者については「全く重要でない」=1から「非常に重要である」=7までの7段階評定であった。

Table 3-1 日本人被験者についての北山式尺度（自己観と人生観を加算）の因子分析結果

	因子負荷量	共通性
第1因子		
人情に厚い	.826	.696
恩を忘れない	.807	.674
義理がたい	.742	.558
思いやりがある	.687	.475
第2因子		
*自分自身の主張を貫く	.774	.601
*何事についても意見を持つ	.698	.510

note. *は独立性項目

Table 3-2 アメリカ人被験者についての北山式尺度（自己観と人生観を加算）の因子分析結果

	因子負荷量	共通性
第1因子		
kind to others	.886	.800
thoughtful of other people	.778	.612
never forget a favor of others	.551	.466
never fail to return obligations to others	.490	.513
第2因子		
*hold on to one's own view	.850	.737
*have one's own opinions on everthing	.619	.393
(return obligations to others	.522	.513)

note. *は独立性項目

結 果

1. 尺度の検討

北山式自己観尺度の因子構造

日本人回答者について、オリジナルの尺度に含まれている、個人の態度・行動傾向項目の評定値と、それに対応している「人生観としての」態度・行動傾向項目での重要度評定値を加算し、その計6項目を因子分析したところ、二因子が抽出された。固有値の大きさは第一因子が2.53、第二因子が0.98であり、寄与率はそれぞれ42.2%と16.4%であった。累積寄与率は58.6%であった。信頼性係数 α は第1因子が0.85、第2因子が0.71であった。第一因子には相互協調性に関する項目がまとまり、第二因子には独立性に関する項目がまとまった (Table 3-1.)。

アメリカ人回答者についても同様に因子分析を行ったところ、日本人と同様の二因子構造となった。固有値の大きさは、第一因子が2.60、第二因子が0.92となり、寄与率はそれぞれ43.3%と15.4%、累積寄与率は58.7%であった。信頼性係数 α は第1因子が0.78、第2因子が0.71であった。第一因子には相互協調性に関連する項目がまとまり、第二因子には独立性に関連する項目がまとまった。しかし「義理堅い」という、日本では協調性に関連すると思われる項目がアメリカでは第二因子に比較的高く負荷した。この点を除くと、日本人回答者とアメリカ人回答者の間で尺度構造はおおむね類似しているものと判断した (Table 3-2.)。

尺度値の文化差と性差

日本人回答者の因子分析の結果から、「他人への思いやり」「受けた恩を忘れない」「人情に厚い」および「義理堅い」の4項目合計得点を協調性得点とし、「自身の主張を貫く」と「何事にも自分の意見をもつ」の2項目合計得点を独立性得点とした。可能な得点範囲は前者が8～56点、後者が4～28点である。これらの得点を日米対象者間で比較したところ、二種の尺度値のいずれも全体としてアメリカ人対象者が日本人対象者より有意に高かった。回答者の性別構成比が不均衡であることから、ここで尺度値の性別比較を試みた。その結果、男性の協調性得点には有意な文化差が認められず、女性でのみ日本人対象者に比べてアメリカ人対象者の得点が有意に高かった (Table 4.)。また独立性得点については、男女ともに、日本人対象者よりもアメリカ人対象者の得点が有意に高かった。この結果は、日本人はアメリカ人よりも相互協調的であるという一般的信念に反している。高田(1998)は日本人でも老人に比べて特に大学生の協調性得点が低いことを指摘している。この結

Table 4 日米被験者の北山尺度の文化差および性差

北山尺度	mean (SD)		t 値	
	日本人 (n=202)	アメリカ人 (n=128)		
男 性	協調得点	43.98 (6.81)	45.39 (7.39)	.95
	独立得点	20.76 (3.46)	23.02 (3.90)	2.93***
女 性	協調得点	42.78 (5.28)	48.07 (5.32)	7.33**
	独立得点	20.79 (2.92)	22.51 (4.41)	3.21***
全 体	協調得点	43.07 (5.70)	47.19 (6.18)	6.12***
	独立得点	20.78 (3.05)	22.67 (4.24)	4.35***

note. ***p<.001 **p<.05 *p<.1

果が調査対象者の属性によるものか、あるいは尺度項目の含意の文化差によるものかは今後吟味すべき事柄であろう。

相互協調的自己観—相互独立的自己観の個人タイプの分類

文化差と個人差の両面について親密感の変動を比較するという目的から、つぎのように回答者を分類した。すなわち、日本人については日本人の尺度平均値を、アメリカ人についてはアメリカ人の尺度平均値をそれぞれ基準にして、相互協調性得点が平均値より高く相互独立性得点が平均値より低い回答者を協調群とした。同様に独立性得点が平均値より高く協調性得点が平均値より低い回答者を独立群とした。協調群は日本人40名(男性13名、女性27名)、アメリカ人20名(男性6名、女性14名)の計60名であった。独立群は日本人46名(男性10名、女性36名)、アメリカ人24名(男性9名、女性15名)の計70名であった (Table 5.)。以後の分析には、これら2群の対象者日本人86名とアメリカ人44名の合計130名を分析対象とする。

Table 5 北山尺度において各自己観が優勢な被験者の人数と尺度値の平均

自己観	mean (SD)			
	日本人(n=86)		アメリカ人(n=44)	
	男性(n=23)	女性(n=63)	男性(n=15)	女性(n=29)
協調群 (n=60)	47.31(2.96) (n=13)	46.63(2.42) (n=27)	51.00(3.29) (n=6)	51.29(2.49) (n=14)
独立群 (n=70)	22.00(1.25) (n=10)	22.58(1.61) (n=36)	25.11(1.97) (n=9)	24.73(1.39) (n=15)

2. 親密感の変動に及ぼす文化と自己観の効果の検討

北山と唐澤(1995)は、感情プロセスの理解には、そこでの対人関係が、どのような場面で、誰を相手にして起きているのか、そしてまたそれを可能にしている文化的暗黙知はいかなるものかについて十分考慮する必要があると述べている。そのことを考慮して、本研究では状況ごとに比較分析を行った。すなわち、各状況における親密感の変動に関して2文化圏(日本・アメリカ)×2自己観(協調・独立)の分散分析を行った (Table 6.)。その結果、刺激状況は、親密感の変動に及ぼす効果によって、文化圏と自己観による差がどちらも認められない状況、文化圏による差のみが見られる状況、自己観による差のみが見られる状況、文化圏と自己観による差がどちらも認められる状況の4つに分類された。

文化圏の差、自己観の差のいずれも見られない状況

文化圏の差、自己観の差がともに見られなかった6状況はいずれも役割状況であった。

親密感が強まる状況では、組織2「同じ組織内の人が、組織内での自分の立場や本心を話してくれた」という1状況のみであった。これは自己開示が相互の親密感を強めるという従来の知見と一致する結果である。

親密感が弱まる状況については、組織3「同じ組織内の人が自分のノルマをきちんと達成していない」、友人2「友人が私のいない所で私のプライバシーを言いふらした」、友人4「友人が、私と行こうと言っていた店や映画に、先に他の友人と行ってしまった」、家族2「家族のメンバーがお互いにケンカをしている」、家族4「自分の生き方に家族が反対し、その進路に進んではいけない

と言われた」の5状況で様に親密感が低下し、日本人とアメリカ人、独立的な人と協調的な人のいずれの間にも変動量の差異は見出されなかった。つまり、ノルマの達成、プライバシーの侵害、約束を守らない、自分の意見に対して反対されることなどの状況は、日米どちらの文化圏でも親密感を弱める状況として共有されており、個人特性による差も見られないため、これらの要因がある文化に特有の暗黙知を形成する要因ではないと言える。

親密感変動に文化圏の主効果だけが見られた状況

親密感の変動に及ぼす効果に文化差だけが見られた状況のうち、日本人対象者がアメリカ人対象者よりも親密感を大きく強めた状況は、文化的状況1の友人、恋人、組織内の人に対して「悩みを相談したところ、参考になるアドバイスはなかったが、十分な共感を示してくれた」と、役割状況の恋人1「恋人が私の前で以前の恋人の話をし始めた」、恋人2「つきあい始めて間もない恋人が、二人だけでどこかへ行こうと言いつつ出た」、恋人3「恋人にありのままの自分を見つめてもらいと言われた」、友人1「友人が欠点など言いつらいことを正直に口にした」という5状況であった。逆にアメリカ人対象者が日本人対象者よりも親密感を大きく強めたのは文化的状況3の友人、恋人、家族に対して「ひとりで解決できない問題の処理を私に頼んできた」という状況であった。

日本文化圏には、親密感を強めるためには共感的態度が重要であるという文化的暗黙知と、親しい相手から弱点を指摘され（反省し向上する契機を与えられる；後述）たり、親密な関係以外では口にできないような話題を持ち出すことによって、親密感が逆に強まるという文化的暗黙知があると考えられる。とりわけ友人1と恋人1においては、アメリカ人対象者は全く親密感の強まりを示さず、反対に親密感を弱める傾向が示された。アメリカ文化には他者から頼られるほどの能力を認めてくれる相手に親密感を強める傾向が内在するのであろう。

日本人の方がアメリカ人よりも親密感を弱める状況は、文化的状況2の恋人において「お金や物を貸したがなかなか返ってこない」、役割状況の友人3「友人が髪型や服装を変えたときに何も言ってくれなかった」、家族3「家族が自分に関係のあることを自分に相談なく決めた」、組織4「同じ組織内の人自分が自分はいして仕事もせずにリーダーとしてふるまう」の4状況であった。このような結果から、恋人は（家族や友人に比べて）お金はすぐ返すべきだ、家族は自分に関係のあることは相談すべきだ、リーダーはリーダーらしく仕事をすべきだ、といった役割期待（らしさ）が日本人では強く、これらを損ねるような場合に日本人は親密感を大きく弱めたものと考えられる。

親密感変動に自己観の主効果だけが見られた状況

文化的状況4の「(恋人)が悪いのは明らかなのに、私の責任にされた」については、日米ともに独立群が協調群よりも親密感を有意に弱めた。このような結果は、日米に共通して、独立的な人は自己の独自性や誇りをより重視するために、自らの失敗による責任意外に責任を取ることが、たとえ相手が恋人であっても、受け入れがたいことであると考えていることを示唆するであろう。

親密感変動に文化圏と自己観の交互作用が見られた状況

文化的状況1「(組織の人)が十分な共感を示してくれた」では、日本人対象者は協調群が独立群より親密感を有意に高め($F(1;127)=38.00, p<.001$)、アメリカ人対象者は逆に協調群が親密感を有意に低下させた($F(1;127)=13.24, p<.001$)。このような結果は次のように解釈できるのではないだろうか。第一に日本文化においては、共感を示すことは相手の心情を察することであり、協調的な関係を形成するために不可欠とされる。そして日本の組織では人間関係をスムーズにするために相手の心情や役割を重んじることが求められる。そのため、特に協調的な人が、友人、恋人といった親密な関係だけでなくフォーマルな関係である組織の人との関係においても、共感的な態度を示すことを相手に強く求める。そしてそれが得られないがために、親密感を大きく弱めたのであろう。し

かしながら、アメリカ文化においては自己の独立性や独自性を強調するために、共感を示すことよりも、問題に対して適切なアドバイスを示すことが要求される。特に組織においては自分自身の能力や技術を発揮するために適切な意見を述べるのが求められると思われる。そのため独立的人人は自分自身の意見を持つことを重視するが、協調的な人は組織でのスムーズな人間関係を独立的人人よりも強く意識するために、そのような行為を自分の周りにも強く求め、適切なアドバイスが無い場合に親密感を大きく弱めたのではないだろうか。第二には、「共感を示す」という行為が日米間で異なる意味を持っていると解釈することである。日本においては他者からの共感を得ることが、自分の現在のあり方についての確証を与える行為として受け取られるのに対して、アメリカでは自分自身が相手へ引き込まれるような、自己の存在を危うくするような行為として受け取られている可能性である。このように日米で異なった意味をもつ可能性のある状況については今後の検討が必要であろう。家族1「離れて暮らしていても家族が支えになると感じた」では、独立群については文化圏による差が見られなかったのに対して、協調群では、アメリカ人よりも日本人がより親密感を強めた($F(1;129)=5.71, p<.05$)。このような結果からは、家族の支えを日本文化でもアメリカ文化でも、独立的人人よりも協調的な人が重視する傾向があることが考えられる。また、状況4の組織「同じ組織内に属する人の方が悪いのは明らかなのに、私の責任にされた」では、独立群において、アメリカ人よりも日本人がより親密感を弱め($F(1;129)=4.16, p<.05$)、またアメリカ人の中では、独立群よりも協調群が親密感をより弱めた($F(1;129)=5.63, p<.05$)。親密な関係にある友人や恋人よりも心情性の薄い「組織の人」から不当に責任を転嫁された場合には、程度の違いはあるものの、いずれの群でも親密感を低下させている。親密感低下の様相に文化圏と自己観の交互作用が生じた原因については、「組織の人」の内包する意味を含めて今後の検討を必要とする。

文化圏の差と自己観の差がともに見られた状況

文化圏の差と自己観の類型差がどちらも見られた状況は、いずれも親密感が強まる状況である。文化的状況1のうち「(家族)に悩みを相談したところ、参考になるアドバイスはなかったが、十分な共感を示してくれた」と役割状況の組織1「同じ組織内の人が自分の属する他の組織での不満を聞いてくれた」の2状況であった。これらの状況では、日本人がアメリカ人よりも親密感をより強めるとい文化差と、協調群が独立群よりも親密感をより強めるとい自己観による差がみられた。このような結果は、日本文化には親密な関係においては特に共感的態度が重要であるという文化的暗黙知が存在すること、そしてそのような暗黙知がアメリカ文化に属する協調群にもある程度共有されていることを示唆している。

考 察

文化圏による差を生じた要因の検討

本研究の結果から、日本人は共感的態度、役割期待、弱点の指摘などに関連した状況が親密感の変動には大きく関わっており、またアメリカ人には個の独立性や、誇りや自信などに関連した状況が親密感の変動に大きく関わっていることが示唆された。それでは何故このような文化的暗黙知が形成されたのであろうか。

北山(1995)は、現代日本における相互協調的自己の形態について、役割志向性と情緒的関与の二次元を指摘している。役割志向性は、社会的に規定された役割に自らをあてはめ、それと同一化することの重要性から派生するという(北山・唐澤,1995)。また役割なしの自己、他者との関係がない自己の存在を確認することが、日本にあっては難しいという恒吉(1992)の報告と南の1953年の報

Table 6 文化×自己観の被験者間2要因の分散分析結果

従属変数	mean (SD)				F value			
	日本人(n=86)		アメリカ人(n=44)		主効果		交互作用	
	協調群(n=40)	独立群(n=46)	協調群(n=20)	独立群(n=24)	文化	自己観	文化×自己観	
状況 1 +	友人	1.58(.81)	1.30(.94)	.05(1.64)	-.08(1.14)	52.79***	1.02	.12
	恋人	1.50(.93)	1.20(1.09)	.16(1.98)	.00(1.50)	27.21***	.90	.09
	家族	1.30(1.04)	.73(.96)	.25(1.71)	.04(1.16)	16.07***	3.18*	.68
	組織	1.13(.85)	.96(.77)	-.20(1.01)	.17(.65)	47.24***	.45	3.14*
状況 2	友人	-1.02(1.00)	-1.13(.83)	-.70(1.34)	-.88(.90)	2.49	.58	.04
	恋人	-.78(.86)	-.78(.81)	-.05(1.15)	-.25(.94)	13.81***	.38	.32
	家族	-.33(.66)	-.30(.59)	-.10(.64)	-.17(.70)	2.32	.04	.13
	組織	-1.69(.95)	-1.83(.85)	-1.65(1.09)	-1.38(1.10)	1.87	.15	1.28
状況 3 +	友人	1.38(.75)	1.17(.93)	1.80(.83)	1.71(.86)	9.01***	.91	.14
	恋人	1.45(.99)	1.46(1.19)	2.10(.97)	2.00(.93)	9.32***	.06	.07
	家族	1.15(1.10)	.80(.96)	1.80(.89)	1.79(.98)	19.45***	.91	.83
	組織	1.00(.96)	.89(1.02)	1.10(.85)	1.08(.88)	.68	.13	.07
状況 4	友人	-1.60(.98)	-1.85(.87)	-1.65(.99)	-1.63(1.01)	.24	.40	.60
	恋人	-1.15(.92)	-1.63(.90)	-1.25(1.21)	-1.46(1.10)	.04	3.44*	.54
	家族	-.79(.95)	-.93(.90)	-.80(1.24)	-1.00(.99)	.04	.86	.03
	組織	-2.10(.90)	-2.33(.76)	-2.40(.68)	-1.88(.99)	.23	.91	5.76**
友人 1 +	1.55(.99)	1.26(1.25)	-.10(1.17)	-.48(.85)	68.12***	2.64	.05	
友人 2	-2.35(.86)	-2.46(.75)	-2.30(.92)	-2.38(.65)	.20	.37	.01	
友人 3	-.30(.56)	-.33(.52)	-.10(.64)	-.04(.91)	4.17*	.02	.13	
友人 4	-1.27(.96)	-1.39(.91)	-1.45(.83)	-1.63(1.10)	1.34	.68	.03	
恋人 1	.30(1.29)	.15(1.44)	-.75(1.48)	-.54(1.10)	12.14***	.01	.51	
恋人 2 +	1.92(.81)	1.63(1.22)	1.15(1.60)	1.38(1.50)	4.96**	.02	1.26	
恋人 3 +	.59(1.04)	.72(1.17)	.50(1.40)	.04(1.40)	2.85*	.53	1.69	
恋人 4	-1.05(.78)	-.83(.77)	-1.50(.95)	-1.54(1.25)	11.95***	.29	.62	
家族 1 +	2.33(.89)	1.74(.93)	1.90(.97)	2.00(.98)	.22	1.96	3.91*	
家族 2	-.68(1.14)	-.26(1.14)	-.50(1.24)	-.33(.70)	.06	2.05	.37	
家族 3	-1.38(.87)	-1.46(.86)	-1.10(.91)	-1.00(.98)	4.84**	.00	.30	
家族 4	-1.15(1.05)	-1.09(1.15)	-.85(.88)	-.91(1.04)	1.42	.00	.10	
組織 1 +	1.18(.71)	.89(.57)	.90(1.02)	.48(.90)	5.88**	6.18**	.24	
組織 2 +	1.68(.73)	1.46(.75)	1.30(.92)	1.42(.88)	1.95	.12	1.27	
組織 3	-1.15(.86)	-1.22(1.05)	-.95(.85)	-1.42(1.06)	.00	2.17	1.22	
組織 4	-2.23(.73)	-2.02(.97)	-1.50(1.10)	-1.46(1.02)	13.73***	.49	.21	

note. 得点範囲を-3~+3に変換。マイナスは親密感の弱まりを示す。

従属変数の+は親密感が強まるものとしてサンプルされた状況。***p<.01 **p<.05 *p<.1

告を紹介している。役割期待に反する状況に遭遇した場合にアメリカ人よりも日本人が親密感を弱めるという本研究の結果も、このような役割重視・役割期待への同調が親密な関係において重要であることを示していると言えよう。また「悩みを相談したところ、十分な共感を示してくれた」という共感的態度を示された状況において、日本人がアメリカ人よりも著しく親密感を強めたことは、北山のいう情緒的関与、すなわち他者との情緒的つながりを重視する共感的態度から生じた結果であろう。また、共感的態度が日本の子育てにおいて重視されている（東, 1994）という指摘もこのような傾向を説明する一つの要因であろう。

また、弱点を指摘された場合に日本人対象者が親密感を強めたことの説明は、「日本人の間では努力が特に重視され、日本文化では自らの欠点、短所、問題などを見つけだし、絶え間ない日常的努力により、これを矯正するという自己向上のプロセスが文化的に広く共有され、是認され、そして暗黙のうちに広く奨励されているのかもしれない」（北山, 1998, p.128）という記述を援用することができよう。すなわち、日本人対象者が、友人から欠点などを指摘されることは、自分の自己向上を促す配慮として積極的にこの状況を解釈したためかもしれない。そして、このような状況が親密感を強める状況として記述されること背景には、日本文化においては、自分の自尊心を低下させかねないマイナス方向の助言によって親密感は弱まらず、むしろそのような助言は自己向上を促す他者の働きかけとしてポジティブな意味をもつのだという文化的暗黙知が存在するものと考えられる。一方、アメリカの子育てでは、子供の能力や才能を誉めることが重視される（東, 1994）。そのため欠点などの指摘は、その言葉通り、自分の能力や才能を否定するものとして理解し、日本人のような親密感の強まりを示さなかったであろう。

アメリカ人が子育てに際して能力や才能を褒めることを重視する傾向は、アメリカ人対象者が「ひとりで解決できない問題の処理を私に頼んできた」という状況で親密感を強めたという結果にも関連していると思われる。アメリカでは、他者を自分の比較や評価を高めるための対象とする傾向があり、問題の処理を頼まれるということは、自らの能力を他者が認めたということになる。その結果、自分の誇りや自信が高められ、そのような効果をもたらしてくれた相手に対しては親密感が強まると考えられる。

日本人が親密感を大きく増減させる状況とアメリカ人が親密感を大きく変動させる状況には、それぞれの文化で優勢な自己観が反映している。そしてまた、このような結果は、特定の刺激状況に遭遇した際の単純な反応の帰結ではなく、優勢な自己観が作り出す文化的背景から生じる、親密な相手への異なる役割期待をも反映しているであろう。

ここで重要なのは、日本人の中では共通の文化的期待として通用する行為が他の文化圏ではまったく反対の意味をもつ可能性を示唆したことである。このような結果は、北山と唐澤(1995)の「それぞれの文化で社会化した個人は、それに対応した形で様々な感情的反応傾向を身につける」という指摘にそい、さらにその反応傾向は全く反対の可能性もあると言いうことができる。

個人特性としての自己観による差が見られなかったことへの考察

本研究で用いたいくつかの状況が親密感の変動に及ぼす効果には、顕著な文化差が認められたが、相対的に自己観の類型差が見られた状況はわずかであった。このような結果は、自己観の優勢さを分類した尺度項目による問題と、翻訳を用いたという方法上の問題が考えられる。また高田(1998)は、アジア文化においては、独立的な行動は特に老人においてマイナスの意味を持つと指摘している。そうだとすれば、アメリカのように、独立性や自己主張を重視して養育される文化で捉えられている「独立性」とアジアの「独立性」は異質なものであるかもしれない。尺度項目を厳しく選定しても、概念表象自体の文化的含意が異なることもあり得る。解決されるべき難題である。同じように感情

を変動させたとしても、その原因やプロセスは国や文化によって異なると考えられる。状況や感情には、自我関与の高いものと、そうではないものがあるのではないだろうか。自尊感情に関連した状況は、自己を高揚させるあるいは卑下させるといった、自己の在り方に関連しており、自我関与の高い状況であると言える。一方、親密感も、自己そのものではなく関係に付随した感情であるため、各状況への自我関与は低いと思われる。そのような違いから、文化的自己観の相違による感情変動の差が見られなかったのかもしれない。今後はこのような点についても検討する必要があると思われる。

また、文化圏と自己観についての交互作用については、一貫した結果が得られなかったことから、今後の調査方法や調査に用いる刺激についてのさらなる洗練化、あるいは他の要因についての検討が急務である。

今後の課題

本報告では二つの仮説のうち一方しか検討していない。続いて今後は、独立的自己観が優勢なアメリカ文化圏で親密感が変動する状況を抽出し、それらの状況に対する日米対象者の反応を比較しなければならない。そのことで文化圏と自己観による差がもたらす親密感の変動への効果が明らかになると思われる。また、個人特性としての文化的自己観については、尺度や構成概念に加え、今後はこのような自己観の違いがどのような要因から生じるのかについても検討する必要がある。そしてその上で、独立-相互依存的自己観に基づく親和行動の相違がどのような発達の過程を経て形成されるのか、また各文化にどのようなプロセスを通じて取り込まれ、状況を定義してゆくのかについても検討することが課題である。

引用文献

- Aronson, E., & Linder, D. 1965 Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 156-171.
- 東洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較に基づいて 東京大学出版会
- Byrne, D., Ervin, C.R., & Lambert, J. 1970 Continuity between the experimental study of attraction and real-life computer dating. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 157-165.
- 大坊郁夫・奥田秀宇(編) 1996 対人行動学研究シリーズ3 親密な対人関係の科学 誠信書房
- 波多野諄余夫・高橋恵子 1997 子どもと教育 文化心理学入門 岩波書店
- 古畑和孝 1993 好きと嫌いの人間関係—魅力と愛の心理学 有斐閣選書
- 柏木恵子・北山忍・東洋(編) 1997 文化心理学—理論と実証 東京大学出版会
- Kelly, H.H. (著) 黒川正流・藤原武弘(訳) 1989 親密な二人についての社会心理学 ナカニシヤ書房 (Kelly, H. H. 1979 *Personal Relationships; Their structures and processes*. Lawrence Erlbaum Associates)
- 北山忍 1994 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山忍 1998 自己と感情—文化心理学による問いかけ— 共立出版
- 北山忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験心理学研究, 35, 133-163.
- Kitayama, S., Markus, H.R., Kurokawa, M., Tummala, P., & Kato, K. 1991 Self-Other Similarity Judgments Depend on Culture. *Institute of Cognitive & Decision Sciences*. University of Oregon.

- Kitayama, S., Markus, H. R., Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. 1997 Individual and collective processes of self-esteem management :Self-enhancement in the United States and self-depreciation in Japan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1245-1267.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 黒川正流 1994 相互依存性の性質と自己解釈図式が対人影響行動に及ぼす効果の検討 平成4・5年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Markus, H. R. 1977 Self-schemata and processing in formation about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松井豊 1987 対人関係の成立 加藤義明(編) 社会心理学 有斐閣
- 南博 1983 日本の自我 岩波書店
- 中根千枝 1972 タテ社会の人間関係 講談社
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.
- 中里浩明・井上徹・田中国男 1975 人格類似と対人魅力一向性と欲求の次元 心理学研究, 46, 265-273.
- Singelis, T.M., 1994, The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的一相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- 高田利武 1998 アジア文化における相互独立性 日本グループダイナミクス学会第46会大会発表論文集, 282-283.
- 恒吉僚子 1992 人間形成の日米比較-かくれたカリキュラム 中公新書